日刊スポーツ　2007年(平成19年)11月21日　水曜日

冬場のくそ力

牛ふんのストーブ用燃料開発 商品化へ

原油高による灯油価格の高騰が続く中、北海道帯広市の企業が、牛ふんを使用した燃料を開発、来年の商品化を目指している。ストーブ用で、燃料費は発熱量ベースで灯油の3分の2程度の価格となる見通し。12月には灯油が1缶（18リ）1700円前後、1リあたり94円へと高騰する可能性があり、安価で環境に優しい「くそ力」への期待が高まっている。

帯広の企業

臭くない高くない コスト灯油の3分の2

日本家畜糞尿が来年の商品化を目指し開発中の牛ふん燃料。ふんのにおいもなく、熱量比で灯油の3分の2の価格を見込む

1日60キロ

高騰が続く灯油価格は12月にも値上げが見込まれ、18リで1700円、1リあたり94円を突破する見通しで、宅配価格では1リあたり100円に届きそうな勢いだ。そんな中、グリーンな“クリン力”に期待が高まっている。

牛ふんの燃料を開発しているのは、牛の運搬搬送輸入販売を地盤（たいひ）かくは搬送を扱う日本家畜貿易（帯広）。材料は、1頭あたり1日60キロは出るという牛ふんだ。畜産業が盛んな十勝の酪農では、牛ふんと伐採した木材の樹皮（バーク）を混ぜて発酵させることで、雑菌死滅、アンモニアなどの解消されるため悪臭が少なく、処分に困る農場が多いことに注目。「余っているなら燃料に」と開発が始まった。

心配されるのはにおいだが、同社によると「『レット状』の段階で乾燥しても臭くない」という。牛ふんとバークを1カ月半かけ混ぜて発酵させることで、雑菌死滅、アンモニアなどの解消されるため悪臭は少なく、処分に困る農場が多いことに注目。「余っているなら燃料に」と開発が始まった。

心配されるのはにおいだが、同社によると「『レット状』の段階で乾燥しても臭くない」という。牛ふんとバークを1カ月半かけ混ぜて発酵させることで、雑菌死滅、アンモニアなどの解消されるため悪臭は少なく、処分に困る農場が多いことに注目。「余っているなら燃料に」と開発が始まった。

改良作業

周囲や樹皮、木くずを圧縮成形した木質ペレットは、1キロあたり40～60円程度だが、牛ふんペレット燃料では、30円程度に抑えられる見通し。火力も木質ペレットと同等まで高める改良作業中だという。来年に、発熱量で比較して灯油の3分の2の価格で販売する予定だ。

ペレットストーブ自体、十数万円から数十万円と高価だが、ペレットは石油のストーブを販売する岩手県釜石市の「クラフトマン」では、発売した04年末時点で200台、昨年は約2倍の出荷。今年は「原油高が追い風で、例年より問い合わせが多く、300台を超えそう」だという。木質ペレットは1キロあたり60円程度で、灯油1リの熱量を得るには、2キロ必要とされ、灯油の方が経済的だったが、しかし、近年は1リ40円台前後のペレット燃料も販売されており、経済性で灯油をしのぐ状況も生まれている。【岡本優】

原油高にふん起?!ふん張れ?!

バイオガス利用も

○…牛ふんや豚ふんから精製されるバイオガスで、バスまで走る。北海道開発局開発調査課では、牛や豚のふん尿から、メタンガスを主成分とするバイオガスの精製、活用を研究中。今月29日には研究に協力している網走市内の畜産会社「インターファーム」で29人乗りのマイクロバスをバイオガスで走らせる試乗会を実施する。同社では、暖房やボイラーにもバイオガスを使用しており「月50万円かかっていた灯油代が0円」だという。